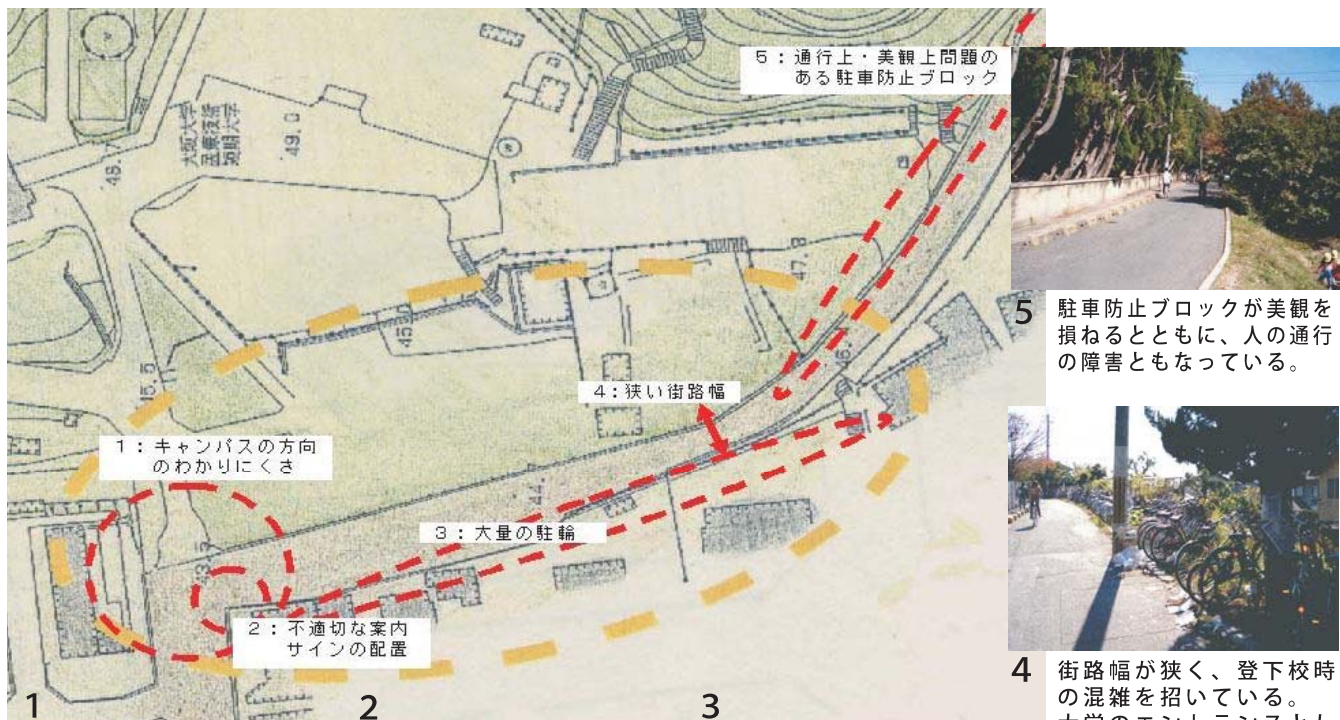




現状の課題

旧医短正門周辺には、曲がり角を受け止める要素が無く、キャンパス方向への自然な誘導ができていない。また、平日には、街路沿いに150台もの自転車が駐輪される。大学の顔として相応しくない、乱雑な印象を与えている。

さらに、阪大坂導入部は街路幅が狭く、登下校時の混乱を招くだけでなく、大学のエントランスとして貧弱な印象を与えている。街路では、駐車場防止ブロックが美観を損ねるとともに、人の通行の障害ともなっている。



1 曲がり角に視線を受け止める要素が無く、キャンパスの方向への自然な誘導ができていない。



2 案内サインが、曲がり角の陰に隠れているため、来訪者の目に付きにくい配置となっている。



3 平日には、街路沿いに150台もの自転車が駐輪される。大学の顔として相応しくない、乱雑な印象を与えている。



5 駐車防止ブロックが美観を損ねるとともに、人の通行の障害ともなっている。



4 街路幅が狭く、登下校時の混雑を招いている。大学のエントランスとして、貧弱な印象を与えている。



エントランス広場から駐輪場方面を見る（ルーバーで駐輪場を隠す）

計画の方針

1. 里山環境と歴史分科文化遺産を持つ待兼山の雰囲気やポテンシャルを最大限に活かし、大阪大学の玄関口に相応しい、美しさを親しみを持ったデザインに修景する。
2. 旧医短正門周辺
ソメイヨシノの並木によって、待兼山のシルエットをシンボライズし、猥雑なアイレベルの景観調整を行う。駐輪場の存在を意識させず、わかりやすく際だった大学の顔を形成する。
3. アプローチ街路
車が支配的なしつらえではなく、人々に開放された空間とするため、歩車一体の広がりのある空間を担保した計画とする。リズムカルな舗装パターンとこれに呼応した照明設備の配置により、意識的な距離感を短縮する。
既存の土留壁は石積みの化粧を施し、やさしく自然な雰囲気を高める。



エントランス広場の整備と阪大坂の修景